

子ども環境の健全化に向けての議論

表記題目の問題について雑感を綴りました。

1. はじめに

子どもの諸施設については立地する地域においてトラブルが多く発生している。例えば、子どもの声が騒音とすることによるトラブル。これについては、(子ども施設を)新規に建設する場合は半地下式や防音壁を設けてといった設計を余儀なくされることが多い。その一方では、この種の問題は地域コミュニティの問題であり、騒音対策の設計手法に頼らずに解決を見出す努力もなされている。

しかし、コミュニティでの解決は前途多難という。なぜであろうか。子どもの問題は一断面のみに着目しても解決できず、社会全体の問題としてとらえることが要求されているからである。ところが肝心の社会においては、子どもの環境にはかなりのいびつさがあり、加えて日頃からの健全な環境づくりが実は難しくなっているのである。

そこで本稿では、かかる問題に向けての取り組みの一步として、なぜ子ども環境がいびつなのか、いびつな状況(阻害要因)について検討し、健全化に向けての方向性を探ることにした。具体的には、生活の視点で教育と技術をも含めて意識について横断的に論議することにした。ただし、貧困やいじめなどの問題は今回扱わない。

2. 子ども環境の阻害要因

社会の様相で気になる傾向(子どもの成長を阻害する要因)を列挙すると、「かまいすぎ、ノーリスク、バリア(囲いづくり)、関係の希薄化、手間隙かけず」がまず挙げられる。これらは、物事の(肥大社会で必要として)「単純化、同質化、効率重視」をもたらしている。

ここで上記要因が実際にどう我らの前に現れてくるのかみよう。まず家庭では、かまいすぎによる人格問題がある。親は子どもの人格を忘れがちとなり、子どもは親に遠慮しがちとなり、大人の都合(場)にあわせるよう努力している。また地域では、核家族世帯が新興団地に結集することにより、地域からは老人世帯域のみが残ってしまうことや、健常者居住地から障害者が施設に入居として結果的には両者の居住分離が生じてしまうこと、があげられる。これは、集住の(同じもの同士ですむ)同質化といってもよく、多様性の概念からは大きく外れることはいままでもない。

3. 阻害要因詳細

3.1 同質化

地域の集住における同質化とは、老いと若きの領域が分かれ、それぞれが同質となっていることを指す。住まい方について核家族が将来、老家族と若家族に分かれた時でも、同質化の様相は変わらないばかりか、若年、中年、老年の人的構成には多様さが失われてしまうといいたい。家庭や地域で年齢層が連続になるようにしたいものである。また、地域で幼保施設と老人施設の隣接だけでなく、家庭や地域に多様な年齢構成を求めたいものである。なお、各種年齢層が一緒に住める経済政策などの必要性はいままでもない。

それにもうひとつ、健常者のみで構成という同質化がある。障害者は健常者と同質ならばいいが、障害者と健常者との区別が結果的に隔離を生むことにもなる。日常、健常者と障害者とが集住あればと思う。なお、子どもの場合、両者が9才頃まで一緒に住んでいると、障害者が特別視されることなく、障害者がいることが当たり前と認識されるという。

3.2 意識の均質化

均質化とは物事の単純化と軌を同じにすることにあり、周りに配慮しすぎることで、一つは協調というモノトーンな考えが、今一つは時には自己の押し殺してしまう考えが生じてくる。そこにはもう批判精神は育たないばかりか、無関心や無関係が横行していく。そのような意識が漂う中では、生活には多様さが霞み、偏った生活が営まれてしまう。是正が必要である。

3.3 人間関係の希薄化

関係の希薄化の要因は何であろうか。(社会的疎外感が要因であるが、受け止める方としてはどう考えているかといえど)人間関係をつくりあげる余裕なしとか、必要性を感じずとか、わずらわし感あり、といったことである。関係の育みが叫ばれている一方では、関係なくしても孤立しても生きていける環境がどしどし作られている。何とかして関係のよさを認識することを考えていかねばならない。ここで関係希薄の様相を二面から捉えたい。

(1)相手の存在希薄:相手の存在が薄い場合、コミュニケーションそのものが図れない。相手の土俵にのる意欲が欠如しがちだから、人とのコミュニケーション機会が減る傾向があり、またコミュニケーションスキルに頼りがちであり取り繕いがちとなっていく。

(2)気配を断つ:内と外の関係の断つことが多くなってきている。風通しは悪くなるは、光が差し込んでこなくなるは、必要以上の防音・遮音により生活音がなくなりかけたり、街の中では見通しが悪くなったり。これらは、中と外の関係、人と環境との関係断つ方向にあるといっても過言ではない。

3.4 手間をかけない

ものごとの結果を求めること急ぐために、手間をかけなくなっている。スピード社会が形先行により、内容や本質をかなぐり捨てるかのように振る舞うことが多くなってきている。そこでは、即物的な目的を小さく求めるあまり、単純化による即決行動が横行し、小さな結果を得ることが当たり前のようにもなっている。(これは随時小さな目的を設定して小さな結果を繰り返し積み上げていくということとは違う。)

これと軌を同じくするのが便利さの追求である。これには、即席間に合わせと機械代用がある。前者には、間に合わせイコール手間暇不要イコールゆっくり行動排除がある。また後者では、省力化としてもものぐさ化として人間の意思による行動が機械で代用ということにもなる。

3.5 かまいすぎ

これは、便利さと効率をもとめるあまり、良かれと思うことを無理強いすることであり、人の行動を一方的にしむけることや個人の意思をかき消すことへとつながっていく。また、かまいすぎの向かう先は、子どもであり、学生であり、あろうことか弱者に対してもある。

かまいすぎの種々をみてみよう。

- ・地域でのかまいすぎ；ノーリスク →池に水なし等
- ・親から子へのかまいすぎ；一方的押し付け
- ・技術のかまいすぎ；ものぐさ推奨か。必要以上の非接触対応。省エネのためのエネ消費
- ・教育のかまいすぎ；本質思考よりも繕い訓練か。きめ細かな指導で自主性の芽摘み
- ・食でのかまいすぎ；ファーストフード、家庭の味・愛情欠落
- ・客への過剰サービス；金につながるベタサービス。マニュアルによる過剰な挨拶

とにかく、この世はかまいすぎといたい。その結果、かまいすぎが当たり前となってきている。オーバーサービス定着については、誰も疑問に思わなくなりつつある。とりわけ、食と技術について、何とかしたいところである。

食事： ファーストフード、孤食、各個別メニュー、

技術： 設備機器：非接触型(カラン、電灯)

3.6 おしつけ

街づくりや地域おこしで関係者が自分の都合を子どもに押し付けている。また、学校においても学校側が子どもへ押し付けとして行動規制をしいている。

(1)観光や街づくりなどのイベントにねらわれる子ども

- ・子どもをだしに：各種行事に子どもをターゲットにしておけば親が来て、街が賑わうとしている。これは、子どもを金落としのシステムにのせていることに他ならない。
- ・巻き込む：主催者側が街の方々や子どもを有無をも言わず巻き込んでいく姿勢が目立つ。そこには街の方々や子どもの了解ないことはもちろん、人格尊重はみじんもない。

(2)教室において子どもに行動規制；廊下と教室の壁を取り除いたオープンスクール形式では隣接教室の授業時の声が騒音にならないように、子どもには「挙手はひじを上げない、声量は中くらい」といった行動規制を求めている。建築的欠陥をなぜ子どもにしわ寄せする。

4. 生活からの子ども環境づくり

4.1 生活には

子ども環境づくりの健全化をめざすことになれば、阻害要因の各個改善もいいが健全な生活の営みの上で解決して行くべきと考える。では、生活の上で何が必要なのであろうか。以下に列挙する；

- ・ゆとりの見出し → 寛容、手間暇かける、
 - ・人格尊重 → コミュニケーション円滑、人間関係改善、押し付け排除
 - ・多様性受け入れ → (多分に上記項目と関係) 多様な考えや行動、バランス感覚
- 以上のように項目化をしたが、各項目は相互関連しているので、生活には何事にも意識的に、ということになる。以降の節で具体的にどうすべきか意識の問題として論じたい。

4.2 大人は変わるべし

生活における子どもと大人の役割は如何に。よく世の中を変えるのは子どもであり、子供が変われば大人が変わるといえるが、それは間違いである。子どもは、社会の都合で行動が束縛されているのである。真っ先に変わらねばならないのは大人であり、大人の意識変革があってこそ環境が次第に健全な方向に動き、子どもとともに生活の充実が図られるのである。もちろん、子どもはなされるがままではなく、自ら内在する力を発揮させて環境づくりに参画しているのである。この点を見逃してはならない。

4.3 人格尊重と多様な感覚

子どもが環境づくりにどう参画していくのか。子どもの参画要件としては、大人からの子どもへの人格尊重や多様な感覚の研ぎ澄ましがあるだろう。すなわち人格と感性がまず身に着ける一番のものである。これがあって初めて、偏った世界ではなく多様な世界としての環境に子どもが自らの力を日々発揮していくといえよう。

(1)人格：本来、子どもは自らの力で成長していくもの。かまいすぎをなくすには、大人は子どもを見守ることであり、これには次の二点を挙げたい。

a)視線 子どもには大人の視線も要→ 視線には子どもの人格認識の役割あり。

b)スケール 子どもは大人のスケールを感じながら成長。スケールをゆがませない。

(2)バランス感覚：これは感覚における多様性といった方がいいものでもある。子どもには、不自由と自由、不快と快といった二律することを体験しバランス観を養う。これを無視して、子どもに例えば自由や快といった一面のみの体験では意識形成には偏りが生ずる。多様性というと、価値観の多様ばかりが世の中でいわれているが、これに感覚の多様性をも含めていくべきである。すなわち、対立二極の良さをみだし、バランス感覚を身に着けることこそ肝要である。

4.4 子どもと大人で関係づくり

環境は大人と子どもによる生活の営みから作られるものであることを念頭に置いて、子どもと大人の関係づくりを論じたい。

(1)子どもは地域で人をつなげる：子どもを介して老若がつながり、健常者と障害者がつながる。人間の本来的な関係性はそうしたことから培われるといえよう。

(2)愛情醸成：家庭はいうに及ばず地域においても愛情が時間をかけてゆっくりと醸成されていく。食であれば手間暇やコミュニケーションなどが欠かせないことは言うまでもない。

(3)多様な体験：体験は何も子どもだけではなく、大人にも必要なものである。特に、批判能力や創造能力は多様性のもとのびのびとした体験がベースとなると考える。すなわち、人間特有の能力は、基礎能力の上に生活における多様な認識を積み重ねて形成されるものである。能力の醸成には生活圏の多様さや広さが必要不可欠といたい。

(4)営みの喜び：何ととっても、人間らしさの一番は喜びを共にすること。共感がなによりである。営みを実感できる環境がつくられるべきである。

5. おわりに

本稿では子ども環境づくりの健全化に際して阻害要因を洗い出しながら検討を加えた。その結果、(1)「大人の都合、効率最優先、経済優先」という社会的要因をもとに「関係希薄化、単純化、かまいすぎ、他」があることを指摘した。(2)環境改善としては、「子ども視点、人間性の醸成、家庭や地域の充実など」を念頭に置いて、大人の意識変革や子どもの内なる力の育成を日常的に図ることを述べた。

なお、子ども環境改善にむけて期待される建築へは、諸問題がコミュニテイで解決できるようにしてほしいものである。また、声を通る地域、笑い声が絶えない街をめざしたいものである。今回は諸実態についての論考である。今後は具体的な実践プログラム作りにはげみたい。